

# 粟津遺跡発掘調査報告書

2020

加古川市教育委員会

# 栗津遺跡発掘調査報告書

2020

加古川市教育委員会





写真 1 完掘全景 1（北から）



写真 2 完掘全景 2（北から）



## 序 文

加古川市は、播磨平野の東部を流れる一級河川加古川の恵みにより、古くから人々が暮らす豊かな場所です。発掘調査を行うと、その確かな軌跡が地中から姿を現します。

このたび完成した本報告書は、粟津遺跡の発掘調査報告書です。

粟津遺跡は、昭和54年に発見されて以来、開発に伴う調査が数度実施され、加古川下流域における歴史を考える上で様々な情報を提供してきましたが、今回の調査を経て、はじめて報告書を刊行することができました。

本書の刊行が、市民の方々にとって郷土の歴史・文化を理解する資料として、また文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査実施及び報告書作成にあたり、多大なご協力を賜りました地元住民の方々や関係機関、関係各位に厚くお礼申しあげます。

令和2年3月

加古川市教育委員会

教育長 小南克己



## 例　　言

- ・本書は、兵庫県加古川市加古川町北在家地内に計画された店舗建設工事に先立ち実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である栗津遺跡に含まれる。
- ・発掘調査及び整理作業、報告書刊行までに要した経費は、事業主である前川建設株式会社に多大なるご協力をいただきました。記して感謝いたします。
- ・発掘調査は、平成 30（2018）年 10 月 2 日から同年 11 月 22 日まで行った。整理作業及び報告書作成は、平成 31（2019）年 3 月 1 日に開始し、令和 2（2020）年 3 月 31 日の報告書刊行をもって終了した。
- ・本調査は、加古川市教育委員会が主体となって実施し、事業主より委託をうけた安西工業株式会社及び株式会社アコードの協力を得た。本書刊行時の調査組織は下記のとおりである。

教育長	小南 克己
教育指導部長	山本 黒久
教育指導部次長	杉本 達之
文化財調査研究センター所長	沼田 好博
文化財調査研究センター副所長	宮本 佳典
文化財調査研究センター庶務担当係長	吉岡 和誠
文化財調査研究センター庶務担当職員	藤原 典子
文化財調査研究センター庶務担当職員	高下 寛
文化財調査研究センター学芸員	山中 リュウ（確認調査担当）
文化財調査研究センター学芸員	淺井 達也（確認調査担当）（発掘調査担当）
文化財調査研究センター学芸員	平尾 英希（確認調査担当）（発掘調査担当）
文化財調査研究センター埋蔵文化財専門員	岡田 美徳
文化財調査研究センター臨時職員	高原 みさ子

- ・遺物の水洗・注記・接合・復元は株式会社アコードが実施した。
- ・遺物の実測・トレース及び造構図トレースは、加古川市臨時職員 園原 悠斗、吉村 慎太郎（以上、立命館大学大学院生）及び株式会社アコードが実施した。
- ・本書に掲載の造構写真は浅井、平尾が撮影し、遺物写真は平尾及び株式会社アコードが撮影した。
- ・本書の執筆・編集は浅井が担当した。
- ・本調査において得られた諸資料・出土遺物は、加古川市教育委員会が保管・管理している。
- ・発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

井上 かおり 大北 浩 岡本 一士 離田 美佳 佐古 雄紀 佐藤 薫 友久 伸子  
西岡 巧次 森内 秀造



## 凡　　例

- ・本文中ならびに挿図中における標高は、東京湾平均海面（T.P）を用いた。また、遺構全体図中の座標値は、世界測地系（第V系）に基づき、作図段階で設定したものである。
- ・本書に掲載の遺構番号は、整理作業時に掲載遺構として抽出したもののみについて、遺構種別ごとに通し番号を付し、それ以外のものは調査時の略号を記している（例：溝1、竪穴建物1など）。
- ・遺構図における線種・線号は以下のとおりである。
  - 調査区（実線・0.4 mm）、遺構の上端（実線・0.3 mm）、遺構の中端（実線・0.2 mm）、遺構の下端（実線・0.1 mm）、擾乱（実線・0.1 mm）、復元線・隠れ線（破線）
- ・遺物実測図中の線種は、外形線・中心線・区画線は実線、ナデによる稜線は破線、ケズリによる稜線は実線で示した。また、須恵器の断面は黒塗りで表現している。
- ・本文中や遺物観察表における遺物の器種名は、「壺」「甕」などの簡易な表現とし、「○○形土器」という表現は用いていない。
- ・土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』（2014年版）に準じた。

# 目 次

卷頭図版

序文

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 調査の経緯 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 発掘調査の方法と経過 .....	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	5
第Ⅲ章 調査成果 .....	12
第1節 既往の調査 .....	12
第2節 基本層序 .....	12
第3節 遺構と遺物 .....	14
第Ⅳ章 まとめ .....	33

図版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図	栗津遺跡の位置	3
第2図	事業範囲と発掘調査範囲	4
第3図	周辺の旧地形	5
第4図	調査地点周辺の遺跡	10
第5図	基本層序（調査区 17 北壁断面図）	13
第6図	全体図	15・16
第7図	竪穴建物1（調査区 18）	17
第8図	土坑1・溝1（調査区 17）	18
第9図	溝1（調査区 11）	19・20
第10図	溝2（調査区 10）	21
第11図	溝3・溝4・溝5（調査区 3）	22・23
第12図	性格不明遺構1（調査区 4）	25
第13図	溝6（調査区 1）	27
第14図	出土遺物1	29
第15図	出土遺物2	30

## 表 目 次

表1	調査地点周辺の遺跡	11
表2	遺物観察表1	31
表3	遺物観察表2	32

## 図 版 目 次

写真 1	完掘全景 1 (北から) .....	卷頭図版 1
写真 2	完掘全景 2 (北から) .....	卷頭図版 1
写真 3	完掘状況 (西半) .....	図版 1
写真 4	完掘状況 (東半) .....	図版 1
写真 5	調査区 17 北壁 .....	図版 1
写真 6	竪穴建物 1 .....	図版 2
写真 7	竪穴建物 1 遺物出土状況 .....	図版 2
写真 8	調査区 17 .....	図版 3
写真 9	調査区 11 .....	図版 3
写真 10	溝 2 .....	図版 4
写真 11	溝 3・4・5 .....	図版 4
写真 12	性格不明遺構 1 .....	図版 5
写真 13	溝 6 .....	図版 5
写真 14	実測遺物 1 .....	図版 6
写真 15	実測遺物 2 .....	図版 7
写真 16	実測遺物 3 .....	図版 8
写真 17	実測遺物 4 .....	図版 9
写真 18	実測遺物 5 .....	図版 10
写真 19	実測遺物 6 .....	図版 11

## 第Ⅰ章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

前川建設株式会社（以下「事業者」という。）は、兵庫県加古川市加古川町北在家 2669 番、2670 番、2671 番、2672 番、2673 番、2676 番、2677 番において店舗建設工事を計画した。工事着手に先立ち、加古川市教育委員会（以下「市教委」という。）は上記事業者から当該地における埋蔵文化財の存否確認の照会を受けた。市教委は、照会地が文化財保護法第 93 条第 1 項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地「栗津遺跡」に該当することを伝え、工事着手 60 日前までに法に基づく届出が必要である旨の回答を行った。

事業者から平成 30（2018）年 6 月 4 日付けで当遺跡の発掘届が市教委へ提出された。市教委は、工事による掘削がどの程度地中の埋蔵文化財へ影響を及ぼすかを調べるために、平成 30 年 8 月 1 日、2 日、6 日に確認調査を実施した。事業対象地 1,995 m<sup>2</sup>に対して合計 52 m<sup>2</sup>の確認調査を実施した結果、弥生時代及び古代を中心とする遺構や遺物を確認した。確認調査の結果を受け、兵庫県教育委員会から本発掘調査を実施する必要がある旨の通知があったことから、市教委と事業者は協議を重ね、工事計画の見直しや工法の変更ができず遺跡の破壊を回避できない範囲 302 m<sup>2</sup>に対して、本発掘調査を実施することになった。

現地調査は敷地内の地盤改良杭部分を主な対象とし、平成 30 年 10 月 2 日から調査を開始し、同年 11 月 22 日に現地調査を終了した。

### 第2節 発掘調査の方法と経過

平成 30（2018）年 10 月 2 日から発掘調査を開始した。工事計画図面に基づき調査区を 18 箇所設定し、廃土置場を確保するため、西側の 11 箇所の調査区を先に調査し、埋め戻した後、東側の 7 箇所の調査区を調査した。

10 月 22 日に西側 11 箇所の造構精査を完了し、翌 23 日から 25 日に各調査区の個別写真撮影を行い、26 日に調査地西半の全景写真の撮影を行った。調査地西半の埋め戻し後、30 日から調査地東半の掘削を開始した。11 月 13 日に東側 7 箇所の造構精査を完了し、翌 14 日から 16 日に各調査区の個別写真撮影を行い、20 日に調査地東半の全景写真の撮影を行った。撮影後、調査地東半の埋め戻しを開始し、22 日にすべての作業を終了し、現地を引き渡した。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

栗津遺跡は、加古川市加古川町栗津に所在し、東西400m、南北110mの範囲にわたる弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺跡として登録されている（第1図）。今回の調査地は、遺跡範囲の南東端に位置しており、市道市役所線と市道平野西河原線が交差する交差点の北西側に位置している（第2図）。

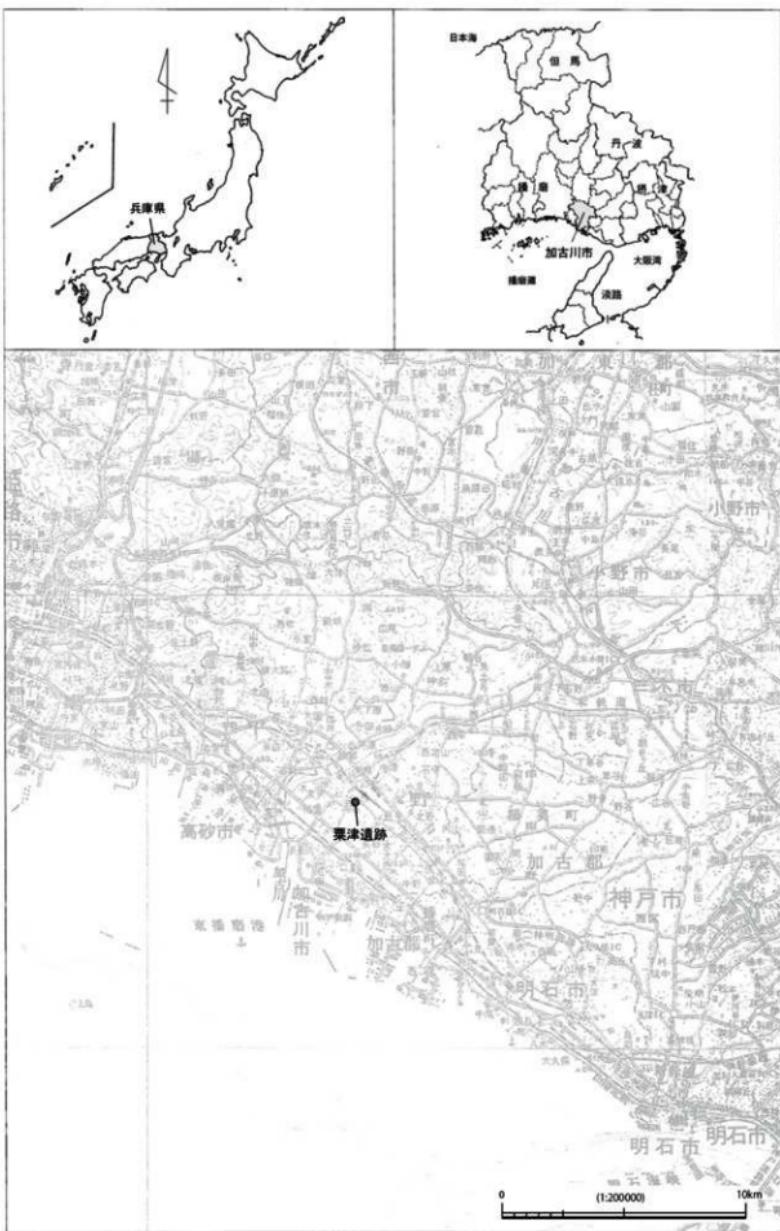
遺跡の所在する加古川町は加古川市域の西南部に位置する。別府川と加古川にはさまれた、JR加古川駅や商業施設、行政施設などが集中する加古川市の中心市街地である。加古川駅付近は、その利便性から中高層の住宅が多く、国道2号線などの幹線道路が東西に貫いている。一方、日岡山や加古川河川敷など緑豊かな公園があり、鶴林寺、称名寺、日岡神社などの古社寺も多い。

加古川町の栗津地域は、JR加古川駅から加古川市役所庁舎へ至る市道市役所線沿いに位置し、駅前周辺地域と市役所周辺の開発に伴って発展してきた地域といえる。

地理的には、市名の由来ともなっている一級河川加古川の下流域に位置し、加古川左岸の沖積平野上に立地している。加古川は、兵庫県丹波市青垣町を源として南流し、加古川市内の日岡山と升田山という2つの岩山の間を通過する。その後播磨灘へ流れ込むが、現在のように流路が固定される以前は、この岩山の間を通過した先是幾筋もの流路に分かれて流れていた（第3図）。その結果、下流域には大規模な沖積平野（氾濫原）が形成されることとなった。この沖積平野の東側は、六甲山塊によって形成された隆起扇状地となっており、神戸市垂水区神出町に所在する雌岡山付近を頂点とする広大な「いなみの台地」を形成している。

栗津遺跡は、上記沖積平野内のうち加古川左岸低地の微高地に遺構が展開している。北側の日岡山から栗津遺跡にかけては、加古川に由来する旧河道が複雑に流れているとされ、その間に有る微高地群に弥生時代の遺跡が多く確認されている。代表的なものとして、北から美乃利遺跡、溝之口遺跡、北在家遺跡があり、栗津遺跡を含めた一連の遺跡群と考えることもできる。

調査地周辺の現地表面は、標高4.5m前後でほぼ平坦となっており、昭和50年代までは田地であったが、土地区画整理事業後は宅地や商業用地として活用されてきた土地である。



第1図 栗津遺跡の位置 (『溝之口遺跡』図版1 兵庫県教育委員会 2006年より作成)



第2図 事業範囲と発掘調査範囲



第3図 周辺の旧地形（『加古川市史』第4巻付図1 兵庫県加古川市 1996年より作成）

## 第2節 歴史的環境

加古川下流域は、河川や海上交通のほか山道に代表される陸上交通の要衝でもあり、多くの遺跡が密集している場所である。加古川市内には、旧石器時代から中世にかけてその時に特徴的な遺跡が残されている。以下に、栗津遺跡の立地する加古川下流域の沖積平野を中心に、時代ごとに変化する遺跡の様相を概観し、当該地における歴史的環境について述べる。

**旧石器時代・縄文時代** 旧石器時代・縄文時代の遺跡は、それ以後の時代に比べて調査例や発見例が少ない。また、「石器」や「縄文土器」など遺物のみが確認されている場合がほとんどである。

旧石器時代の遺跡としては、今回調査地の北東に位置し、加古川狭窄部の一角を形成する日岡山（標高約60 m）の丘陵斜面に日岡山遺跡（第4図4、以下括弧内の番号は第4図に対応）がある。また、東側のいなみの台地上を流れる喜瀬川沿岸には山之上遺跡（1）や播磨町に所在する大中遺跡（播6）がある。いずれも表面採集の遺物が中心であるが、石器製品だけでなく剥片や碎片（チップ）なども多く採集されていることから、地中にブロックやユニットを形成するような文化層が残されている可能性も考えられる。

縄文時代の遺跡としては、栗津遺跡の東側段丘上の縁辺に坂元遺跡（634）がある。晩期の埋甕土坑が複数調査されており、微高地に埋甕を用いた墓域が展開していたと考えられている（渡辺2009）。他に、前出の大中遺跡や加古川右岸側の沖積地にある砂部遺跡（9）、その北側の段丘上にある岸遺跡（7）などにおいて晩期の土器出土例があるが、現在のところ遺構は確認されていない。なお、

市域全体では、八幡町上西条にある宮山遺跡において後期の堅穴建物跡や集石遺構が検出されたという報告例があるが、詳細は不明である（松下 1984）。

#### **弥生時代** 弥生時代になると遺跡の数は大幅に増加する。

前期の遺跡としては、栗津遺跡の北東の加古川下流域左岸に形成された自然堤防上に立地する美乃利遺跡（218）があげられる。発掘調査の結果、溝や土坑とともに、広範囲に広がる水田跡が検出されている。また、別府川を挟んだ東側段丘上に立地する坂元遺跡でも土器の出土が認められる。さらに、東側の喜瀬川右岸の大中遺跡では土坑が検出されている。しかし、前期では加古川右岸側の沖積地においてより重要な遺跡が展開している。砂部遺跡と東神吉遺跡（8）は、現在の加古川右岸沖積地上に隣りあって所在する集落遺跡である。両者を同一の集落と考える見方もあり、前期における拠点的な集落と考えられている。砂部遺跡では、他地域においても発見例の少ない土器焼成土坑が複数検出されており注目される。

中期の遺跡としては、美乃利遺跡とその南西に隣接する溝之口遺跡（10）、坂元遺跡がこの地域の代表例として挙げられる。前期から続く集落が中期において飛躍的に成長し、この時期における拠点集落といえる規模に拡大する。特に溝之口遺跡は、開発に伴う調査も多く実施されたことから、堅穴建物が密集する居住域、方形周溝墓を主体とする墓域、水田が営まれた生産域という集落景観が徐々に明らかにされつつある。また、溝之口遺跡出土の豊富な土器群は、東播磨の中期弥生土器の基準資料として紹介されることも多い。東側のいなみの台地上では遺跡は少ないが、中期の後半になって喜瀬川寄りの平岡町高畑において長畑遺跡（555）が成立し、喜瀬川右岸では大中遺跡で堅穴建物が検出されている。加古川の右岸側では、沖積地内に前期から継続する砂部遺跡があり、丘陵上には中期のみ短期的に存続した集落と考えられる平山遺跡（11）などがある。

後期の遺跡としては、溝之口遺跡が集落として継続しているとともに、隣接する坂元遺跡や美乃利遺跡において、より多くの遺構・遺物が確認されるようになる。栗津遺跡（294）からは土坑墓、溝、土器溜りとともに、多くの弥生土器が出土し、この時期に新たに成立した集落遺跡といえる。また、中期後半に成立した長畑遺跡も継続して集落が営まれる。一方、後期の前半に遺構の存在が途絶える大中遺跡は、後期後半になって再び集落として成立し、終末期には拠点集落といえるほどの規模に成長していく。ほかに、終末期の遺跡として著名なものに西条 52 号墓（西条山手二丁目）がある。開発によりすでに消滅しているが、工事直前に行われた緊急発掘によって、円丘部と突出部によって構成された墳丘墓であったことがわかっている。石櫛に閉まれた埋葬施設からは、内行花文鏡などが出土している。一方、加古川右岸側では、引き続き砂部遺跡があり、段丘上の岸遺跡でもまとまった土器の出土が認められるが、いずれも遺構は乏しい。

#### **古墳時代** 古墳時代は、集落遺跡の発見例や調査事例が少なく詳細な検討は進んでいない。対して、加古川流域一带に築かれた豊富な古墳群の様相について多くの研究や報告がなされている。

前期の古墳としては、栗津遺跡の北東側に位置する日岡山古墳群が著名である。これまで本格的な調査は行われていないものの、宮内庁が所管する、ひれ墓古墳（26）（「日岡陵古墳」ともいう）をはじめ合計 8 基の大型古墳が確認されている。そのうち、ひれ墓古墳、勅使塚古墳、西大塚古墳、南大塚古墳、北大塚古墳の 5 基は前方後円墳で、残る西車塚古墳、東車塚古墳（すでに消滅）、狐塚古墳の 3 基は円墳もしくは前方後円墳と考えられている。ひれ墓古墳は、景行天皇皇后にあたる「福<sup>みゆき</sup>御在原大姫命」の陵墓に指定されている。古墳群中から採集された遺物としては、南大塚古墳や勅使塚

古墳から三角縁神獸鏡、東車塚古墳から三角縁神獸鏡・方格T字文鏡・獸文鏡及び石劍2点、北大塚古墳から埴輪片や短甲片などがある。海岸部には、栗津遺跡の南東段丘上の縁辺部に聖陵山古墳(23)が単独で所在しており、特異な位置を占めていることで注目される。前方後円墳もしくは前方後方墳と伝えられるが、これまで発掘調査が行われたことはなく前方部はすでに失われている。集落遺跡としては、溝之口遺跡内の南半部において堅穴建物などが検出されており、日岡山古墳群の母体となる集落の可能性が指摘されている。また、喜瀬川沿岸の大中遺跡は大規模集落として存続しており、前期の古墳群との関係が注目される。

中期になると、日岡山でみられたような首長墓群が東側の西条地区の丘陵地において築かれるようになる。行者塚古墳、人塚古墳、尼塚古墳という3基の大型古墳が西条古墳群として国史跡に指定され保存整備されている。また、中期後半には加古川右岸で平荘湖古墳群が新たに築かれる。平荘湖古墳群は、カンヌ塚古墳(45)や池尻2号墳(44)に代表される堅穴式石室ないし堅穴系横口式石室を埋葬施設とする段階から、升田山15号墳や池尻16号墳に代表される横穴式石室を埋葬施設とする段階まで合計68基の古墳が確認されており、後期まで連続する市内最大規模の古墳群である。ダム建設による緊急発掘において、馬具や金製耳飾などの渡来系遺物が多く副葬されていることが明らかにされた。現在は、古墳の多くが昭和41(1966)年に造られた人工湖である平荘湖の湖底へと没し墳丘を確認することはできない。中期の集落遺跡としては、引き続き溝之口遺跡が存続し、その南側の沖積地に立地する北在家遺跡(292)と栗津遺跡でも堅穴建物が検出されている。溝之口遺跡では、堅穴建物跡から複数の韓式系土器が出土している。加古川右岸側では、砂部遺跡で掘立柱建物跡や溝、土坑が検出され、韓式系土器が複数出土している。

後期の古墳は、市内各所に円墳や方墳が数多く残されている。主要なものは、中期後半から続く平荘湖古墳群のほか、日岡山の南東斜面にも再び古墳群が築かれ、弥生時代の集落が所在した坂元遺跡においても小規模な古墳群が検出されている。また、栗津遺跡の南東側の段丘縁辺上に所在する具平塚古墳(305)は、江戸時代中期に記された『播磨鑑』において、平安時代中期の人物である村上天皇の皇子、具平親王の陵墓として紹介されているが、現地における観察所見から、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の円墳と推定される。集落遺跡としては、溝之口遺跡で引き続き堅穴建物跡の調査事例がある。また、東隣の坂元遺跡では、堅穴建物跡のほか、集落と古墳群の間において火を用いた祭祀土坑が調査されている。さらに、古墳群のすぐ南側では、石見型盾形埴輪をはじめ、古墳群に用いるための各種の埴輪を焼成した窯跡なども検出されており、集落北側の高台に古墳が築かれ、その隣接地において祭祀や埴輪製作が行われた様子をよく伝えていている。他には、前期以降集落の痕跡が確認されなくなった大中遺跡において、再度堅穴建物が検出されるようになる。

**奈良時代・平安時代** 奈良時代は、律令制の導入により新たな行政単位が設けられ、今回調査地周辺は「播磨国賀古郡」の範囲に含まれる。また、栗津遺跡の北側には官道として整備された古代山陽道(488)が通っていたと推定されている。古代山陽道の推定ラインを南東に進むと、古大内遺跡(220)が位置しており、「賀古駅家」に比定されている。山陽道に接続する駅家の入口付近と方形区画の北西側が発掘調査されている。古大内遺跡の北東側には、古代寺院である野口廃寺(223)がある。発掘調査の結果、瓦積基壇で構築された塔・講堂・小堂宇が確認されている。北側の曇川沿岸には石守廃寺(225)があり、法隆寺式の伽藍配置を基準とし、この地域で産出される竜山石(流紋岩質凝灰岩)製の心礎を持つ塔跡や瓦積基壇で構築された金堂跡などが調査されている。加古川右岸側では、沖積地を望む段丘上に中西廃寺(228)がある。発掘調査は行われていないが、採集された瓦から平安時

代後期まで存続したことがわかっている。市内には、ほかにも西条庵寺（226）や山角庵寺（506）、古堂庵寺（227）などの古代寺院が知られている。加えて、溝之口遺跡では、遺跡範囲の北側を中心に官衙遺跡を推測させる遺構・遺物が確認されている。具体的な遺構としては、柵や溝に囲まれ「コ」字形に配置された建物跡や、倉庫群と考えられる多数の掘立柱建物跡、井戸などがあり、それらの遺構から「大穀」と記された墨書き土器や銅製・石製の鉢皿具などが出土したことから「賀古郡衙」の候補地となっている。美乃利遺跡からは、「郡」と記された墨書き土器なども出土している。さらに、溝之口遺跡にはほど近い坂元遺跡、大野遺跡（636）からも同時期の遺構・遺物が多数確認されており、今後の調査の進展によって、郡衙や駅家と、それを取り巻く集落の様相が明らかにされることが期待される。また、溝之口遺跡の範囲内北端は、古代瓦が表面採取されたことを理由に「溝之口庵寺（224）」として遺跡登録されているが詳細は不明であり、郡衙との関係が注目される。加古川右岸側では、沖積地に砂部遺跡、神吉南遺跡（221）、天下原遺跡（222）、升田遺跡（219）などがあり、段丘上に中西台地遺跡、西村遺跡などがある。いずれも比較的小規模な集落と考えられ、中西庵寺を囲むような位置関係にある。

平安時代は、先述した古代寺院の多くが9世紀までにいったん廃絶する傾向にあり、「日本三大実錄」において、播磨諸郡の官舍・諸定額寺の堂塔が悉く倒壊したことが載る、貞觀10（868）年の播磨国大地震との関連が指摘されている。後期までは、新たな寺院として鶴林寺（614）、佐伯寺跡（478）、教信寺（621）などが成立したと考えられる。鶴林寺は、聖徳太子の建立という縁起を持つが、本尊の薬師如来像や法華堂（太子堂）・常行堂の年代観から、この時期に伽藍が整えられたとする説が有力となっている。集落跡としては、引き続き溝之口遺跡、美乃利遺跡、坂元遺跡において多くの遺構・遺物が調査されており、加古川右岸側では中西台地遺跡で集落が継続していたものと考えられている。

#### **鎌倉時代・室町時代 市内全域で調査事例が少なく明確な遺跡は少ない。**

美乃利遺跡において鎌倉時代の掘立柱建物跡や屋敷墓が検出され、坂元遺跡では掘立柱建物跡や水田跡などが検出されている。美乃利遺跡に接する大野遺跡では、やはり鎌倉時代の掘立柱建物跡や墓が検出されている。また、同じ沖積地上に立地する栗津大年遺跡（622）では、室町時代まで続く掘立柱建物跡や木棺墓などが検出されている。いずれの遺跡も集落跡と考えられる。

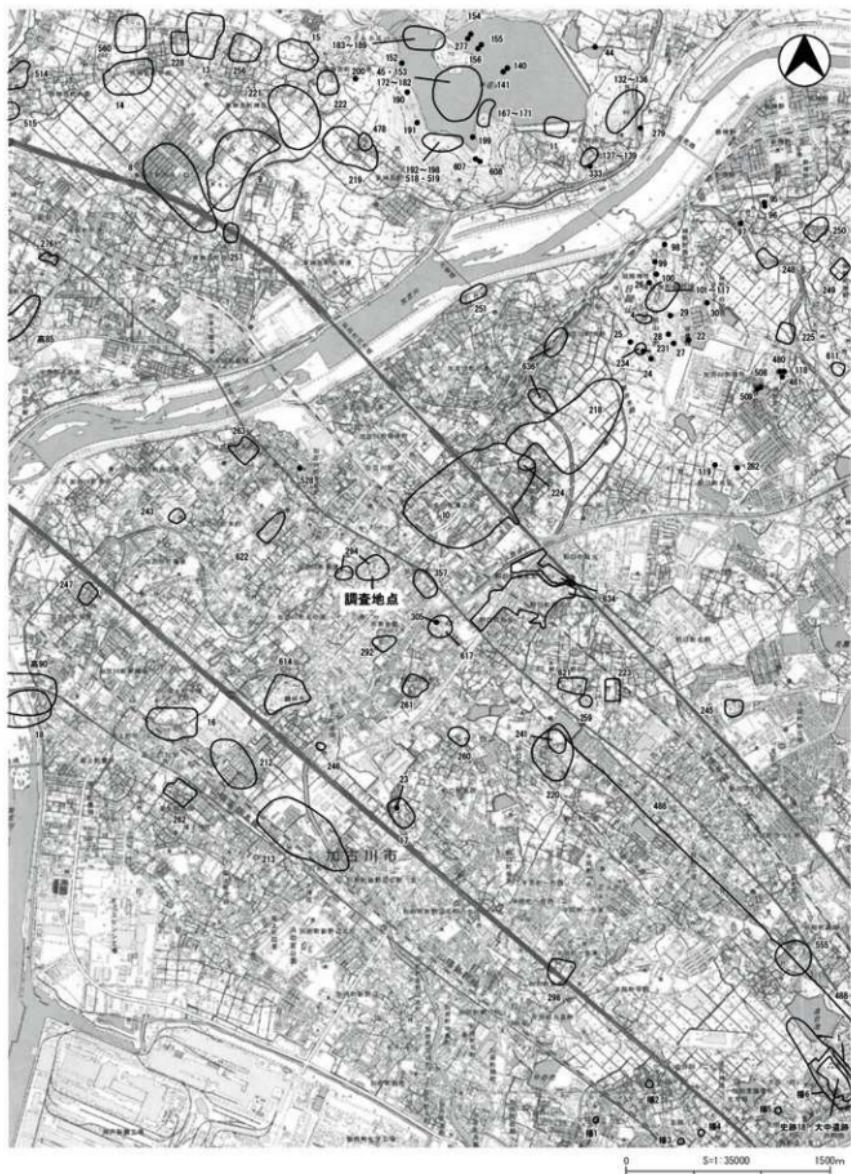
近年に実施された調査では、市域南部の別府町石町に位置する石町中世墓（643）から平安時代後期から鎌倉時代の区画墓が検出され、市域北東部の八幡町上西条に位置する古堂庵寺（227）からは鎌倉時代の屋敷墓が検出された。

#### **加古川右岸側では、中西台地遺跡において方形居館に付属する堀が調査されている。**

ほかに、具体的な調査事例は乏しいものの、室町時代に築かれたとされる城や構居が数多く存在したことが文献資料の分析などからわかっている。加古川下流域で主要なものとしては、戦国期の羽柴秀吉による播磨平定に深く関わる加古川城跡（263）、野口城跡（259）、神吉城跡（256）をはじめ、加古川左岸側に石彈城跡（243）、横倉城跡（245）、中津構居跡（251）、福屋構居跡（247）、尾上構居跡（262）、長砂構居跡（260）、一色構居跡（258）、手末構居跡（249）などがあり、右岸側には岸城跡（514）、砂部構居跡（257）、平津構居跡（276）などが遺跡登録されている。なお、加古川城跡については、鎌倉時代を通じて播磨の守護所が置かれていたものと考えられ、城として活用される以前の様相にも注意を払う必要がある。

**江戸時代以降** 今回調査地周辺は、江戸時代をとおして姫路藩領であった。栗津遺跡の北側に位置する加古川町寺家町周辺は、京都から下関を通り長崎に至る西国街道（中国路）の宿場町として栄え、加古川には高瀬舟が往来し、物流の拠点といえる場所であった。江戸時代の遺跡は、中期に俳人として活躍した松岡青蘿の加古川町寺家町にある墓所が「松岡青蘿墓（528）」として登録されている。また、平成 16（2004）年に実施された坂元遺跡の発掘調査では、江戸時代の道路跡が検出されており、西国街道の一部と考えられている。

明治時代になると、加古川には橋が架けられ、明治 21（1888）年に山陽鉄道（現 JR 山陽本線）が開通し、明治 31（1898）年には日本毛織工場の操業が始まるなど近代化が進む一方、宿場町としての機能は衰えていった。大正 2（1913）年には播州鉄道（現 JR 加古川線）が開通したことで高瀬舟も姿を消した。現在の加古川市は、播磨灘沿岸の工業地帯や神戸・大阪方面のベッドタウンとして栄えている。



第4図 調査地点周辺の遺跡

(『兵庫県遺跡地図 第3分冊 遺跡分布地図』兵庫県教育委員会 2011年より作成)

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
1	山之上遺跡	旧石器	139	平山 3 号墳	古墳	243	右弾城跡	室町
4	日岡山遺跡	旧石器	140	池尻 3 号墳	古墳	245	横倉城跡	室町
7	岸遺跡	縄文～弥生	141	池尻 4 号墳	古墳	246	安田構居跡	室町
8	東神吉遺跡	弥生～古墳	152	升田山 15 号墳	古墳	247	船屋構居跡	室町
9	砂部遺跡	縄文～奈良	153	池尻 16 号墳	古墳	248	石守構居跡	室町
10	清之口遺跡	弥生～平安	154	池尻 17 号墳	古墳	249	手末構居跡	室町
11	平山遺跡	弥生中期	155	池尻 19 号墳	古墳	250	高田構居跡	室町
13	中西台地遺跡	弥生～室町	156	池尻 20 号墳	古墳	251	中津構居跡	室町
14	中西低地遺跡	弥生～古墳	167	池尻 32 号墳	古墳	256	神吉城跡	室町
15	神吉遺跡	弥生後期	168	池尻 33 号墳	古墳	257	砂部構居跡	室町
16	今福遺跡	弥生後期	169	池尻 34 号墳	古墳	258	一色構居跡	室町
17	長砂遺跡	弥生後期	170	池尻 35 号墳	古墳	259	野口城跡	室町
18	猪之口遺跡	弥生後期	171	池尻 36 号墳	古墳	260	長砂構居跡	室町
22	東車塚古墳	古墳	172	池尻 37 号墳	古墳	261	細田構居跡	室町
23	聖陵山古墳	古墳	173	池尻 38 号墳	古墳	262	尾上構居跡	室町
24	眾塚古墳	古墳	174	池尻 39 号墳	古墳	263	加古川城跡	室町
25	軒使塚古墳	古墳	175	池尻 40 号墳	古墳	276	平津構居跡	室町
26	ひれ墓古墳	古墳	176	池尻 41 号墳	古墳	277	池尻 18 号墳	古墳
27	西車塚古墳	古墳	177	池尻 42 号墳	古墳	279	地藏寺 6 号墳	古墳
28	南大塚古墳	古墳	178	池尻 43 号墳	古墳	282	水足 2 号墳	古墳
29	西大塚古墳	古墳	179	池尻 44 号墳	古墳	292	北在家遺跡	弥生～古墳
30	北大塚古墳	古墳	180	池尻 45 号墳	古墳	294	栗津遺跡	弥生～古墳
44	池尻 2 号墳	古墳	181	池尻 46 号墳	古墳	305	具平塚古墳	古墳
45	カシヌ塚古墳	古墳	182	池尻 47 号墳	古墳	333	平山 4 号墳	古墳
95	二塚 1 号墳	古墳	183	池尻 48 号墳	古墳	357	平野遺跡	弥生
96	二塚 2 号墳	古墳	184	池尻 49 号墳	古墳	478	佐伯寺跡	平安
97	君神社古墳	古墳	185	池尻 50 号墳	古墳	480	石守 2 号墳	古墳
98	日岡山 1 号墳	古墳	186	池尻 51 号墳	古墳	481	石守 3 号墳	古墳
99	日岡山 2 号墳	古墳	187	池尻 52 号墳	古墳	488	古代山陽道	奈良
100	日岡山 3 号墳	古墳	188	池尻 53 号墳	古墳	508	石守古墳群 4 号墳	古墳
101	日岡山 4 号墳	古墳	189	池尻 54 号墳	古墳	509	石守古墳群 5 号墳	古墳
102	日岡山 5 号墳	古墳	190	升田山 1 号墳	古墳	514	岸城跡	室町
103	日岡山 6 号墳	古墳	191	升田山 2 号墳	古墳	515	岸南遺跡	弥生
104	日岡山 7 号墳	古墳	192	升田山 3 号墳	古墳	518	升田山 11 号墳	古墳
105	日岡山 8 号墳	古墳	193	升田山 4 号墳	古墳	519	升田山 12 号墳	古墳
106	日岡山 9 号墳	古墳	194	升田山 5 号墳	古墳	528	松岡青蘿墓	江戸
107	日岡山 10 号墳	古墳	195	升田山 6 号墳	古墳	555	長頸遺跡	弥生
108	日岡山 11 号墳	古墳	196	升田山 7 号墳	古墳	560	西村遺跡	弥生～奈良
109	日岡山 12 号墳	古墳	197	升田山 8 号墳	古墳	607	升田山 13 号墳	古墳
110	日岡山 13 号墳	古墳	198	升田山 9 号墳	古墳	608	升田山 14 号墳	古墳
111	日岡山 14 号墳	古墳	199	升田山 10 号墳	古墳	611	天神前遺跡	奈良～平安
112	日岡山 15 号墳	古墳	200	天下原古墳	古墳	614	鶴林寺	平安～中世
113	日岡山 16 号墳	古墳	212	尾上遺跡	弥生～古墳	617	具平塚遺跡	弥生
114	日岡山 17 号墳	古墳	213	浜の宮遺跡	弥生～古墳	621	數信寺	平安～中世
115	日岡山 18 号墳	古墳	218	美利遺跡	弥生～縄倉	622	栗津大年遺跡	中世
116	日岡山 19 号墳	古墳	219	升田遺跡	奈良	634	坂元遺跡	縄文～中世
117	日岡山 20 号墳	古墳	220	古大内遺跡	奈良	636	大野遺跡	平安～中世
118	石守 1 号墳	古墳	221	神吉南遺跡	弥生～奈良	685	米田遺跡	弥生～中世
119	水足 1 号墳	古墳	222	天下原遺跡	弥生～奈良	690	朝日町遺跡	弥生～古墳
132	地藏寺 1 号墳	古墳	223	野口庵寺	奈良	播1	本荘散布地	中世
133	地藏寺 2 号墳	古墳	224	満之口庵寺	奈良	播2	古田 1 号散布地	中世
134	地藏寺 3 号墳	古墳	225	石守庵寺	奈良	播3	古田 2 号散布地	中世
135	地藏寺 4 号墳	古墳	228	中西庵寺	奈良	播4	古田 3 号散布地	中世
136	地藏寺 5 号墳	古墳	231	日岡山壹柏塚	弥生	播5	大中散布地	弥生～中世
137	平山 1 号墳	古墳	234	日岡遺跡	弥生～古墳	播6	大中遺跡	旧石器～古墳・中世
138	平山 2 号墳	古墳	241	古大内城跡	室町			

表 1 調査地点周辺の遺跡

※遺跡番号の「高」は高砂市、「蒲」は播磨町の遺跡

## 第Ⅲ章 調査成果

### 第1節 既往の調査

栗津遺跡は、昭和 54（1979）年 6 月、北在家土地区画整理事業に伴う土木工事中に加古川東高等学校教諭は川長氏が多量の弥生土器片を採集したことによって発見された。これを受け加古川市教育委員会は土地権利者と協議を行い、同年 7 月 7 日から 8 月 22 日までは川氏を担当者として発掘調査が実施された（第 2 図参照）。この調査では、土坑墓、溝、土器溜りなどが検出され、多くの弥生土器が出土し、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落遺跡であることが明らかになった。なお、この時の調査トレンチは今回調査地と一部重複している。

区画整理事業はその後も継続され、それに伴い昭和 59（1984）年 7 月 20 日から 8 月 23 日まで発掘調査が実施された（第 2 図参照）。この調査では、古墳時代中期と考えられる堅穴建物 1 棟が検出され、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

また、平成 21（2009）年 5 月 20 日から 29 日まで、店舗建設に伴い発掘調査を実施している（第 6 図）。この調査は今回開発地と同一敷地内であるので、本書において併せて報告する。

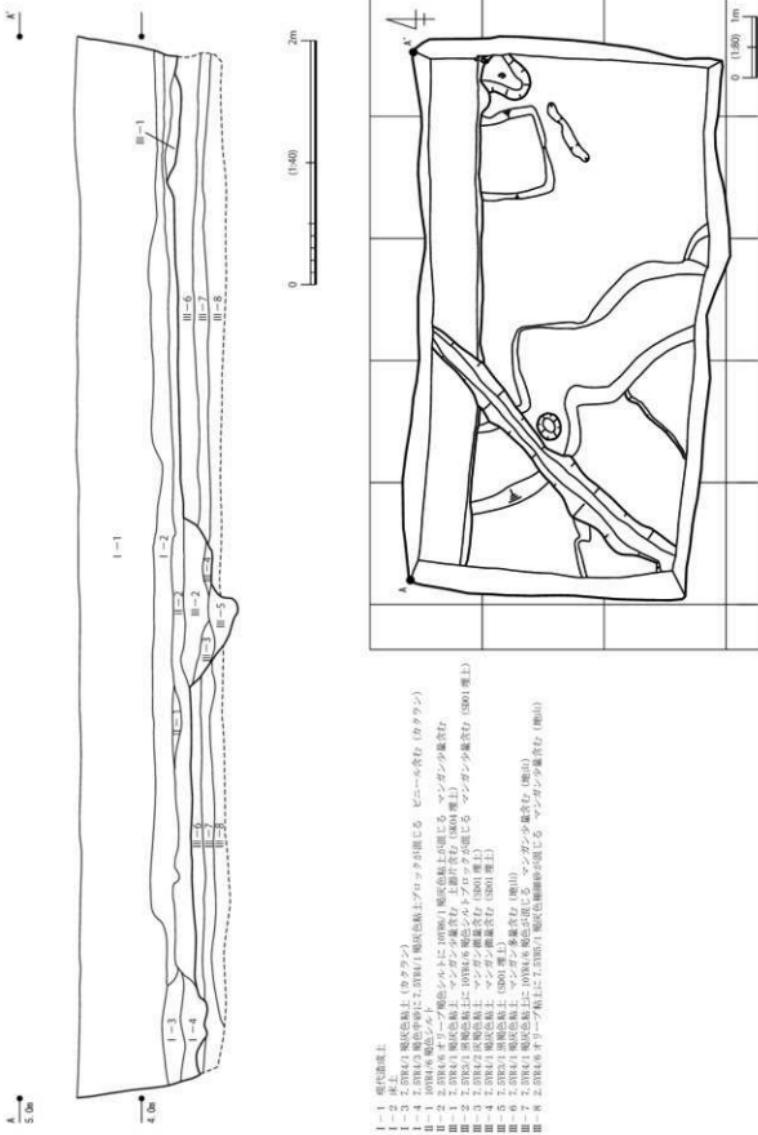
### 第2節 基本層序

今回調査地の層序は地点によって異なる部分があるが、大別するとほぼ共通の層序である、大きく 3 段階（第 I ～ III 層）の基本堆積により成り立っている（第 5 図）。

第 I 層は、調査前までの商業用地造成によって盛られた造成土や、旧耕作土及びそれに伴う床土層である。現地表面の標高は約 4.5 m で平坦であり、本層は地表下約 0.6 m まで堆積している。

第 II 層は古代および弥生時代の土器等を含む遺物包含層である。この面から古代の溝状遺構を検出した。

第 III 層は自然堆積層（いわゆる地山）である。本層上面が弥生時代の遺構面である。本層上面の標高は 3.55 ～ 3.80 m であり、調査地西側に向かって検出面の標高が低くなっている。



第5図 基本断面(調査区17北壁断面図)

## 第3節 遺構と遺物

### 1. 概要

平成21（2009）年度に220 m<sup>2</sup>、今回調査において302 m<sup>2</sup>の合計522 m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した。調査の結果、弥生時代及び古代の遺構を合計52基検出した（第6図）。内訳は、堅穴建物跡1棟、土坑15基、溝状遺構18条、ピット11基、性格不明遺構7基である。

本報告書では、上記の遺構のうち、比較的の遺存状態が良好で遺物が一定量出土している遺構を選定し、堅穴建物跡1棟、土坑1基、溝状遺構5条、性格不明遺構1基および土器溜りについて、以下にその詳細を述べる。

平成21（2009）年度と今回の調査と合わせて遺物収納コンテナ4箱分の遺物が出土した。弥生土器が多いが、土師器、須恵器も若干出土した。本報告書では、出土遺物のうち比較的の遺存状態が良好で実測・記録可能な遺物69点を抽出した。すべて破片であり、完形で出土したものはない。実測でできたものは壺、甕の底部がほとんどである。今回報告する弥生土器は62以外すべて弥生時代後期の土器である。

### 2. 弥生時代

#### ■堅穴建物1（S101）（第7図、写真6・7）

**位 置：**調査区18に位置する。遺構の大半は調査区外へ及んでおり、検出できたのは全体の約1/4である。遺構確認面の高さは標高3.6mで、現地表面から約0.8m下に位置している。

**形 態：**平面形は円形である。断面形はおむね凹字状である。

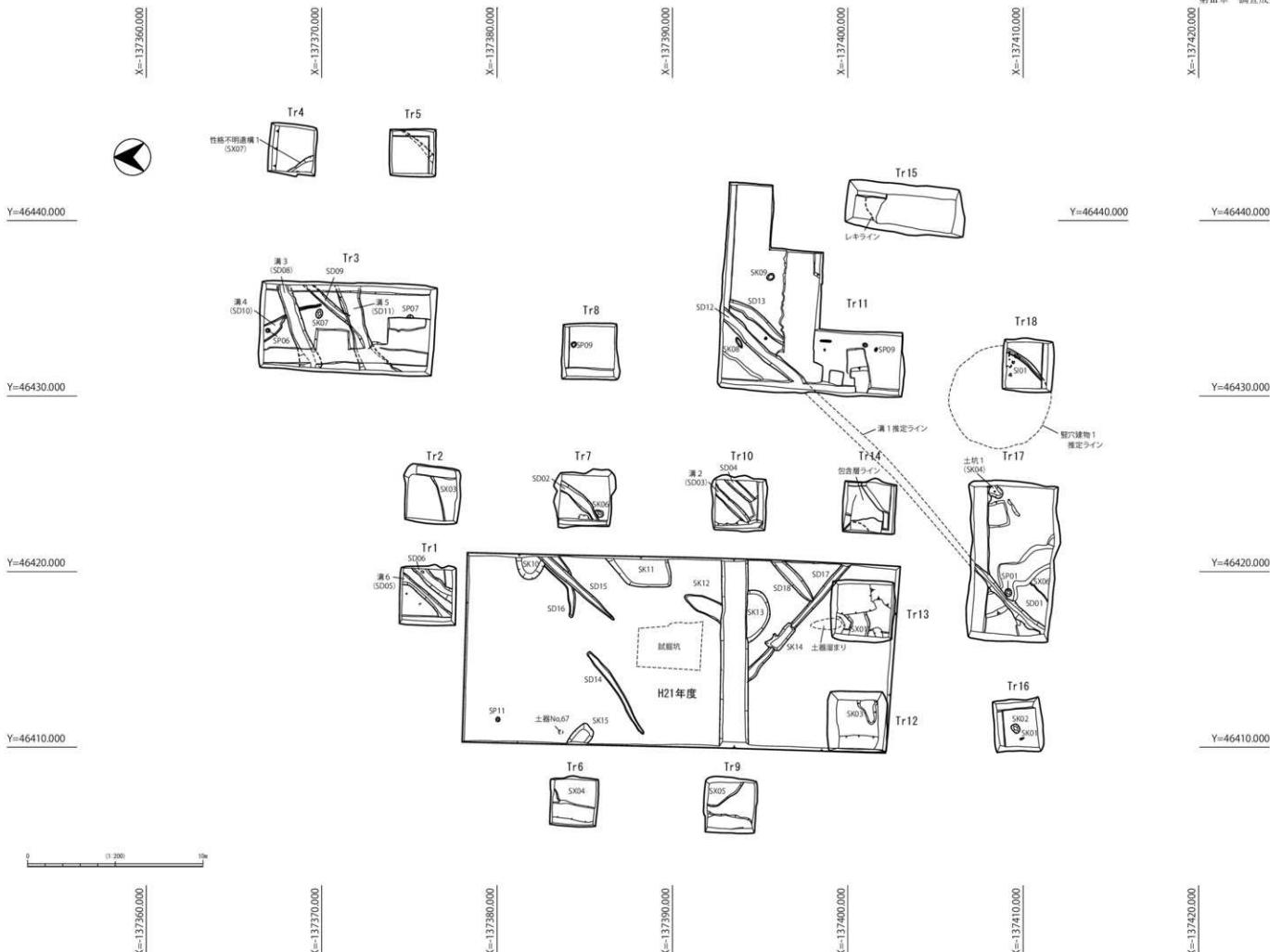
**規 模：**全体規模は推定であるが、直径約6m前後で、床面までの深さは0.1mを測る。建物の面積は27 m<sup>2</sup>前後となる。

**付帯施設：**周壁溝を検出したが、柱穴などは検出できなかった。周壁溝は調査区内において明瞭に観察でき、幅0.25m、床面からの深さ0.15mを測る。

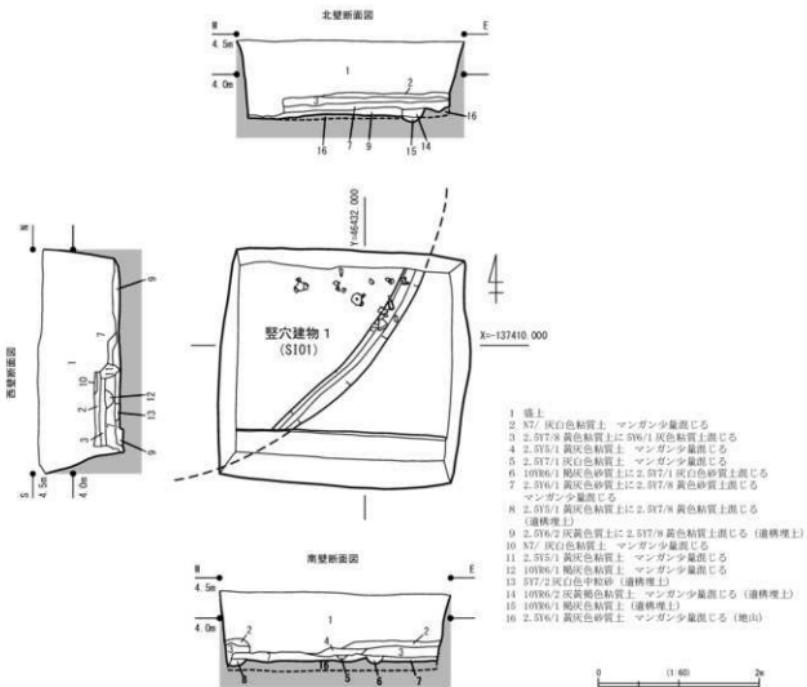
**土 層：**検出面から床面上までの埋土は単層で、灰黄色土に黄色粘質土が混じる層が遺構全体に堆積している。周壁溝は調査区北壁において断面観察したところ、2層に区分される。上層は灰黄褐色粘質土にマンガンが少量まじり、下層は褐灰色粘質土が地山層を掘り込んで堆積している。

**出土遺物：**床面上から数点の弥生土器が出土した。形が良好に残っているものが多く、壺、高杯、鉢などの破片が床面上に散らばっていた。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な弥生土器5点を抽出した。1は壺の底部で、ドーナツ状の上げ底になっている。2～4は高杯である。摩滅が著しく外縁調整は不明である。5は鉢である。底部がドーナツ状の上げ底になっており、口縁部が屈曲して大きく開いている。

**遺構時期：**出土した遺物から、本遺構の帰属時期は弥生時代後期頃と考えられる。



第6図 全体図



第7図 豊穴建物 1 (調査区18)

### ■土坑1（SK04）（第8図、写真8）

**位 置：**調査区17に位置する。調査区の北東隅で検出され、調査区外に広がっているため検出できるのは全体の一部である。遺構確認面の高さは標高3.8mで、現地表面から約0.8m下に位置している。

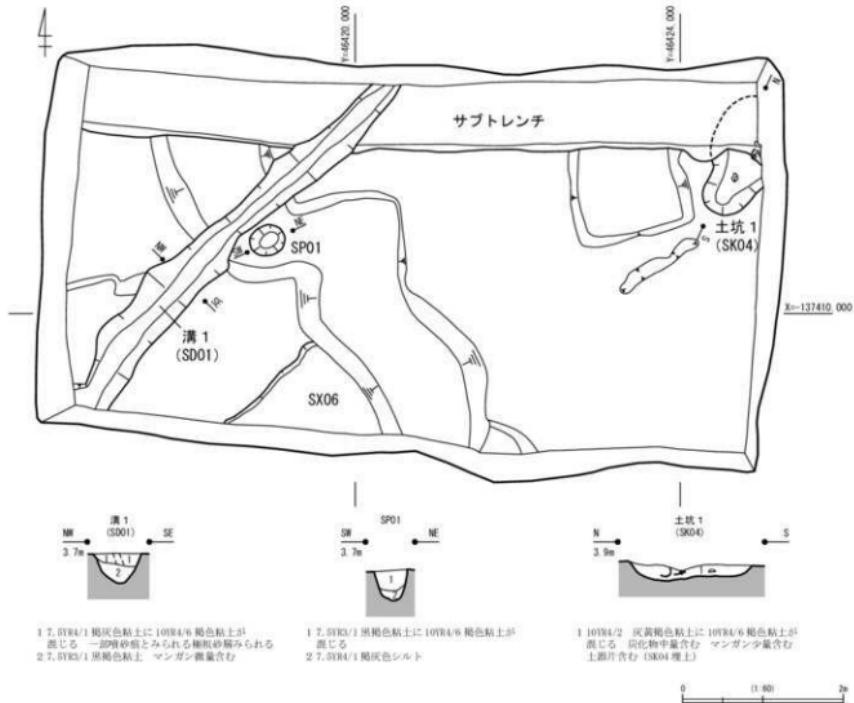
**形 態：**遺構の北東側が調査区外へ及んでいるため平面形は不明である。断面形は、壺状の皿形である。

**規 模：**検出された範囲での規模は長軸1.0m、短軸0.72m、深さ0.18mを測る。

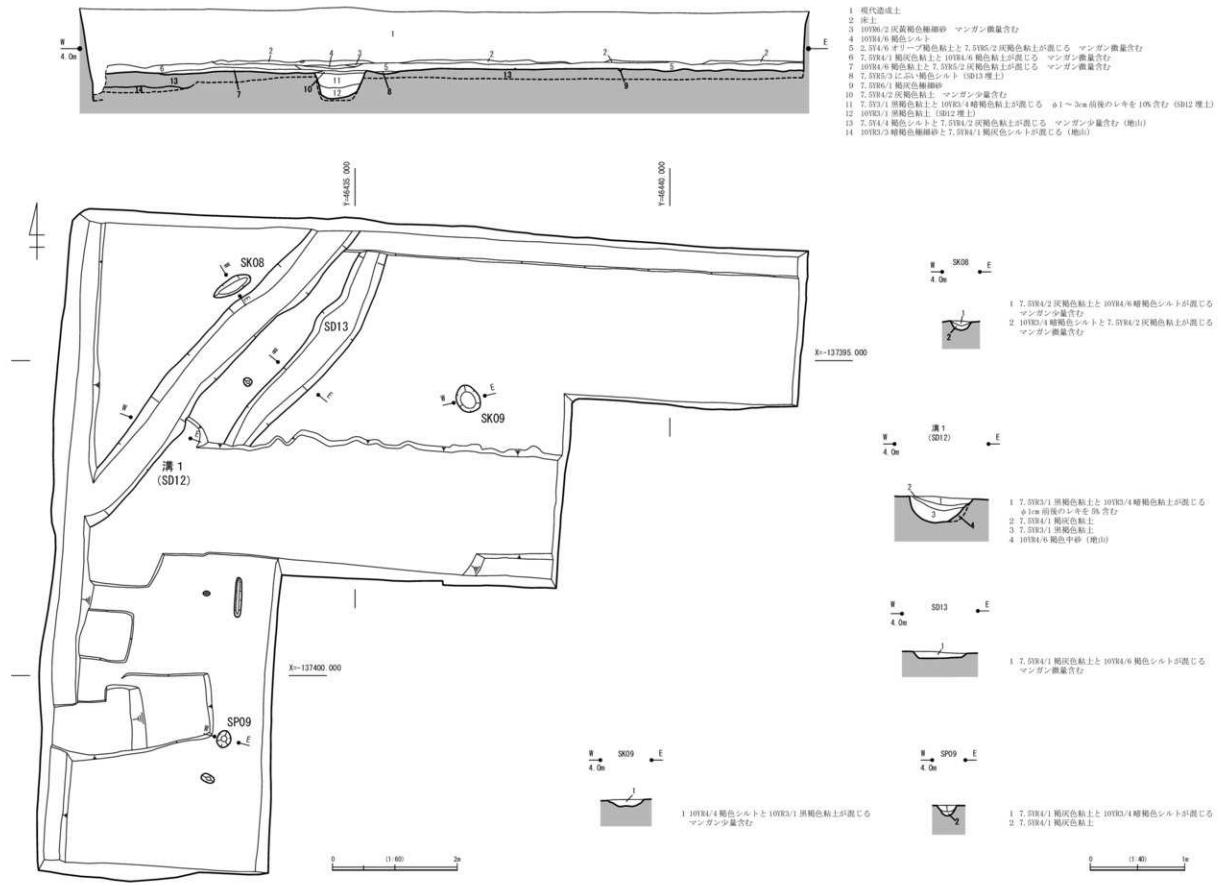
**土 層：**灰黄褐色に褐色が混じる粘土を主体とする單一層である。炭化物を中量、マンガンを少量含んでいた。

**出土遺物：**遺構内から弥生土器の破片が複数出土した。土器の種類はほとんど壺、甕を主体とし、今回の報告では出土遺物のうち実測可能な弥生土器3点を抽出した。6、7は壺の底部。6、7ともに内外面がナデ調整され、6の内面には板ナデ痕とユビオサエが確認できる。8は甕の底部である。内面はナデ、外面は平行タタキ、底部外面はタタキ後ナデを施している。

**遺構時期：**出土した遺物から、本遺構の埋没時期は弥生時代後期頃と考えられる。



第8図 土坑1・溝1(調査区17)



第9図 溝1(調査区11)

**■溝1 (SD 01・12) (第8図・第9図、写真8・9)**

**位置:** 調査区11と1において検出され、遺構の規模と軸方向から同一の溝と判断した。調査区17中央付近および調査区11北西隅で検出され、両調査区をまたいで伸びているが、検出できたのは全体の一部である。遺構確認面の高さは標高3.65mで、現地表面から約0.85m下に位置している。主軸方向はN-55°-Eを示す。

**形態:** 平面形は溝状で、断面形は外側に開くV字状をしている。

**規模:** 検出された範囲での規模は調査区11では長さ5.9m、最大幅0.66m、深さ0.44m、調査区17では長さ5.5m、最大幅0.58m、深さ0.43mを測る。

**土層:** 3~4層に区分され、概ね黒褐色粘土を主体としている。

**出土遺物:** 遺物は出土しなかった。

**遺構時期:** 遺構検出面が土坑1と同じであることから、本遺構の埋没時期は弥生時代頃と判断した。

**■溝2 (SD 03) (第10図、写真10)**

**位置:** 調査区10に位置する。調査区内の中央を南西および北東方向へ伸びている。両端が調査区外に及んでいるため検出できたのは全体の一部である。遺構確認面の高さは標高3.78mで、現地表面から約1.0m下に位置している。主軸方向はN-60°-Eを示す。

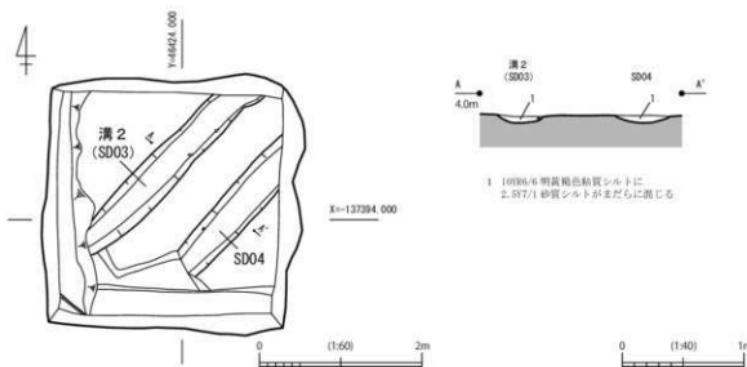
**形態:** 平面形は溝状で、断面形は浅い皿状をしている。底面は平坦で、緩やかに立ち上がる。

**規模:** 検出された範囲での規模は、長さ2.60m、幅0.48mを測る。深さは0.05mを測る。

**土層:** 明黄褐色粘質シルトに砂質シルトが混じる単層である。遺構内からは弥生土器の破片が出土した。

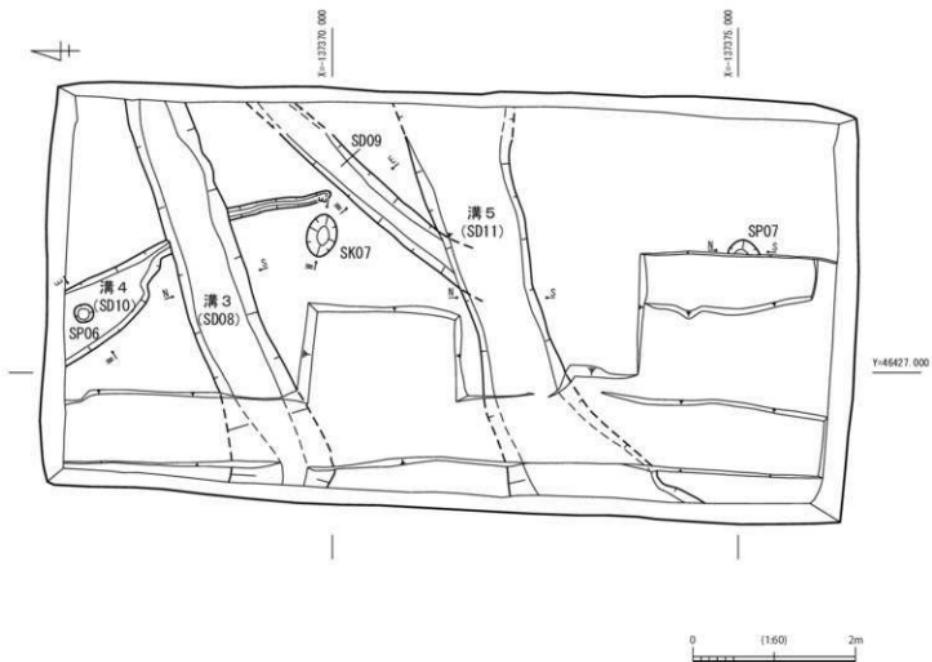
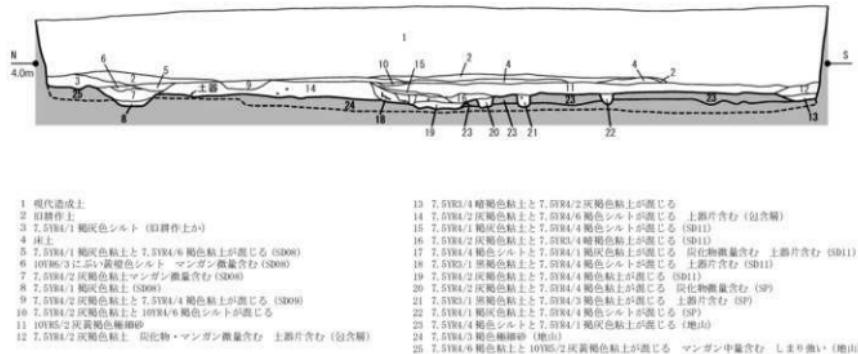
**出土遺物:** 弥生土器の壺、甕などの破片が出土した。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な弥生土器2点を抽出した。9は壺の底部で、内外面ともにナデ調整されている。10は甕の口縁部で、内外面ともにナデ調整されている。

**遺構時期:** 出土した遺物から、本遺構の埋没時期は弥生時代後期頃と考えられる。なお並行する溝(SD 04)からは遺物が出土していないが、検出面と軸方向がほぼ同一のため、本遺構と近い時期に掘削されたものと考えられる。

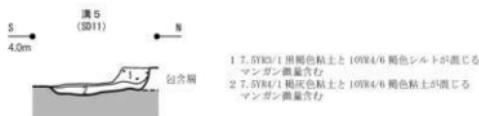
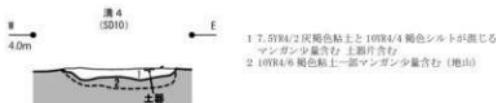


第10図 溝2(調査区10)

Tr03



第11図 溝3・溝4・溝5(調査区3)



**■溝3（SD 08）（第11図、写真11）**

**位 置：**調査区3に位置する。調査区内の北側で検出され、調査区外の東西方向に伸びているため検出できたのは全体の一部である。遺構確認面の高さは標高3.72mで、現地表面から約0.85m下に位置している。主軸方向はN-70°-Eを示す。

**形 態：**平面形は溝状で、断面形は回字状である。

**規 模：**検出された範囲での規模は、長さ4.70m、幅約0.80mを測る。深さは0.28mを測る。

**土 層：**4層に区分される。黄灰色粘質土を主体とし、マンガンが少量混じっている。なお、本遺構の南側には、地山直上に褐色シルトの遺物包含層（東壁第14層）が堆積しており、本遺構はその包含層を掘り込んでいる。調査面積が狭く詳細は不明だが、この包含層は何らかの遺構埋土の可能性がある。

**出土遺物：**弥生土器の壺、甕などの破片が出土した。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な壺1点を抽出した。11は壺の底部である。外面はヨコナデ調整されている。

**遺構時期：**出土した遺物から、本遺構の埋没時期は弥生時代後期頃と考えられる。なお検出面と軸方向が溝5とほぼ同一のため、両者は近い時期に同じ目的で掘削された可能性がある。

**■溝4（SD 10）（第11図、写真11）**

**位 置：**調査区3に位置する。調査区内の北端で検出され、溝3に切られている。調査区外の北側に伸びているため、検出できたのは全体の一部である。遺構確認面の高さは標高3.74mで、現地表面から約0.83m下に位置している。北西方向、南東方向へ緩やかに湾曲する溝で、およよその軸方向はN-25°-Wを示す。

**形 態：**平面形は溝状で、断面形は歪な皿状である。

**規 模：**検出された範囲での規模は、溝3の北側と南側で大きく異なり。長さ3.54mで、幅は北側で0.68m、南側では0.12mを測る。深さは0.09mを測る。

**土 層：**灰色粘土と明黄褐色シルトが混じる単層である。

**出土遺物：**弥生土器の壺、甕などの破片が出土した。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な壺1点を抽出した。12は壺の底部である。内面に指ナデ痕、底部に板ナデ痕が確認できる。

**遺構時期：**出土した遺物から、本遺構の埋没時期は弥生時代後期頃と考えられる。溝3との切り合い関係から、遺構の掘削時期は溝3より古ないと考えられる。

**■溝5（SD 11）（第11図、写真11）**

**位 置：**調査区3に位置する。調査区内のほぼ中央を東西方向へ伸びている。両端が調査区外へ伸びているため検出できたのは全体の一部である。遺構確認面の高さは標高3.72mで、現地表面から約0.85m下に位置している。主軸方向はN-70°-Eを示す。

**形 態：**平面形は溝状で、断面形は回字状である。

**規 模：**検出された範囲での規模は、長さ5.0m、幅約1.00mを測る。深さは0.30mを測る。

**土 層：**5層に区分される。上層は黒褐色粘土、下層は褐灰色粘土を主体とする。上層には土器片を多く含んでいた。なお、本遺構の北側には、地山直上に褐色シルトの遺物包含層（東壁第14層）が堆積しており、本遺構はその包含層を掘り込んでいる。調査面積が狭く詳細は不明だが、この包含層は何らかの遺構埋土の可能性がある。

**出土遺物：**弥生土器の壺、甕などの破片が出土した。今回の報告では、出土遺物のうち実測可能な壺2点を抽出した。13、14は壺の底部である。摩滅のため調整は不明瞭であるが、内面には板ナデ、

外面底部にはユビオサエが確認できる。14の底部は上げ底になっている。

**遺構時期：**出土した遺物から、本遺構の埋没時期は弥生時代後期頃と考えられる。なお検出面と軸方向が溝3とほぼ同一のため、両者は近い時期に同じ目的で掘削された可能性がある。

### ■性格不明遺構1（SX07）（第12図、写真12）

**位置：**調査区4に位置する。調査区内の南西隅で検出された。調査区外の南西に広がっているため検出できたのは全体の一端である。遺構確認面の高さは標高3.55mで、現地表面から約1.10m下に位置している。

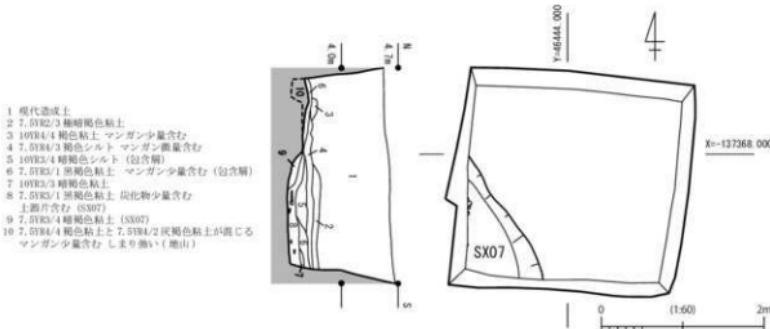
**形態：**遺構の南西側が調査区外へ及んでいるため平面形は不明である。断面形は、皿形である。

**規模：**検出された範囲での規模は長軸1.4m、短軸0.95m、深さ0.20mを測る。

**土層：**2層に区分されるが、ほとんどが黒褐色粘土を主体とする埋土である。黒褐色粘土層には弥生土器片が多く含まれていた。

**出土遺物：**弥生土器の壺、甕などの破片が出土した。今回の報告では出土遺物のうち実測可能な壺2点を抽出した。15は壺の底部で、外面はナデ調整されている。16は甕の底部で、外面は平行タタキ後ナデ調整、内面は板ナデ痕が確認できる。

**遺構時期：**出土した遺物から、本遺構の埋没時期は弥生時代後期頃と考えられる。



第12図 性格不明遺構1（調査区4）

### ■土器溜り

**位置：**平成21年度調査区の南側で地山面精査中に検出された。遺構確認面の高さは標高3.50mで、現地表面から約1.00m下に位置している。

**形態：**数十点の弥生土器片が集中して出土しており、意図的に投棄されたものと考えられる。遺構の堀方は確認できなかった。

**規模：**検出された範囲での規模は長軸1.8m、短軸0.60mを測る。

**出土遺物：**弥生土器の壺、甕、高杯、鉢などの破片が出土した。今回の報告では出土遺物のうち実測可能な土器31点を抽出した。17～21は壺、22～38は甕、39、40は高杯、41～47は鉢である。

17は広口壺の口縁部である。内外面ともにナデ調整され、口縁端部は指で摘みつつヨコナデされている。18は壺の底部である。外面にミガキと工具痕が確認できる。19は壺の底部である。内面はナデ、底部にユビオサエが認められる。外面はミガキと工具痕が確認できる。底部は粘土板形成され

ており、全体に黒斑が残されている。20は壺の底部である。内面底部中央付近に工具痕が認められる。21は壺の底部である。外面にわずかに被熱痕が確認できる。

22は甕である。外面は平行あるいは右上がりのタタキで、口縁端部は上方につまみ上げている。

23は甕である。体部の大部分が欠損している。内面はユビオサエ後ナデ、体部外面は右上がりのタタキ後ヨコナデである。底部の外面はユビオサエされている。24は甕の底部である。内面はヨコナデ調整で、全面に黒斑が残されている。外面は右上がりのタタキ、全面に被熱痕が残されている。

25は甕の底部である。内面はユビオナデされ、全面に黒斑が認められる。体部外面は右上がりタタキで成形され、底部外面はユビオサエが残る。26は甕の底部である。内面はナデ調整され、体部外面は右上がりのタタキ、底部外面にはユビオサエが残る。全体的に被熱している。27は甕の底部である。内面調整は不明瞭で、体部外面は右上がりのタタキで成形される。外面には体部から底部に黒斑が認められる。28は甕の口縁部である。外面は右上がりのタタキで成形される。口縁部は内外面ともにヨコナデされており、端部に黒斑が残されている。29は甕である。内面はナデまたはオサエ調整、外面は連続的な右上がりタタキが施されているが、体部半ばでタタキの向きが変化している。底部が輪台技法による上げ底になっている。30は甕の胴部下半である。内面上部はユビオサエ、下部は右上がりのケズリにより調整されている。外面は右上がりのタタキを施す。31は甕の口縁部である。内外面ともにナデ調整され、口縁端部内面がわずかにへこんでいる。32は甕の底部である。内面ナデ、外面にユビオサエが確認できる。33は甕の底部である。底部内面に黒斑、外面は摩滅が著しいがわずかにタタキが確認できる。34は甕である。外面は右上がりのタタキで、体部に黒斑が残されている。底部は歪であるが、上げ底になっている。35は甕の底部である。内外面の調整は不明であるが、外面に被熱痕が確認できる。36は甕である。体部外面は右上がりのタタキで、口縁部はナデ調整されている。37は甕の底部である。外面は右上がりのタタキで成形され、底部がわずかにへこんでいる。38は甕の底部である。内面はナデ調整され、外面は右上がりのタタキで成形される。

39、40は高杯脚部である。39、40ともに内面に絞り痕がある。外面はミガキ調整され、4方向から円形透かし孔が施されている。

41は鉢である。内外面の調整は不明であるが、底部外面にユビオサエが確認できる。底部はドーナツ状の上げ底になっている。42は鉢である。内外面の調整は不明であるが、内面に黒斑、外面に煤が付着していた。底部が一部欠損しているが、穿孔の可能性がある。43は鉢である。内外面の調整は不明である。44は鉢である。摩滅のため内外面の調整はよくわからないが、内面はわずかにナデあるいはミガキが確認でき、口縁部外面は強いヨコナデが施されていた。45は外反口縁鉢の体部である。体部の器壁の厚さは一定に作られている。摩滅が著しく内外面の調整は不明であるが、口縁部外面は強いヨコナデが施されていた。46は鉢の底部である。摩滅のため内外面ともに調整不明。底部は円板状の粘土板で形成されており、黒斑が残されている。47は外反口縁鉢の口縁部と考えられるが、口径の復元は不可能であった。

### 3. 古代

#### ■溝6（SD 05）（第13図、写真13）

**位 置：**調査区1に位置する。調査区内のほぼ中央を北東および南西方向へ伸びている。両端が調査区外へ伸びているため検出できたのは全体の一部である。遺構確認面の高さは標高3.80 mで、現地表面から約0.94 m下に位置している。主軸方向はN-45°-Eを示す。なお、本遺構は調査区西壁の

観察から遺物包含層（第II層）の上面から掘り込まれていることを確認している。

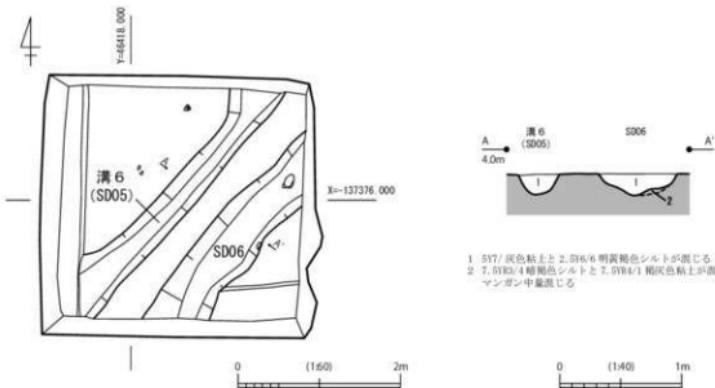
**形 態：**平面形は溝状で、断面形は凹字状である。

**規 模：**検出された範囲での規模は、長さ 3.5 m、最大幅約 0.56 m を測る。深さは 0.16 m を測る。

**土 層：**灰色粘土と明黄褐色シルトが混じる単層である。

**出土遺物：**須恵器、土師器片が出土した。今回の報告では出土遺物のうち実測可能な須恵器鉢 1 点を抽出した。48 は須恵器の鉢である。内外面ともにタタキ目が施され、口縁部に付着物が認められる。焼成は良好である。

**遺構時期：**出土した遺物から、古代の溝と考えられる。同一面で並行する溝（SD 06）は遺物が出土していないが、遺構埋土および検出面が溝 6 と同じであるため、同時期の溝と推定される。さらに溝 6 の下層から別の溝（SD 07）が検出されているが、この溝からも須恵器片が出土しているため、溝 6 以前に掘られた溝と考えられる。溝の性格は深さおよび並行する溝の間隔から古代の耕作溝と考えられる。



第13図 溝 6（調査区 1）

#### 4. 第II層出土遺物

49 ~ 69 は第II層から出土した遺物である。弥生土器の壺、甕、高杯、鉢および須恵器の破片が出土した。今回の報告では出土遺物のうち実測可能な土器 21 点（弥生土器 19 点、須恵器 2 点）を抽出した。49 ~ 54 は壺、55 ~ 62 は甕、63、64 は高杯、65 ~ 67 は鉢、68、69 は須恵器の碗である。

49、50 は調査区 3 から出土した壺の底部である。外面調整は摩滅のため不明であるが、49 は底部がドーナツ状の上げ底になっている。50 には内面底に工具痕が残されていた。

51 は調査区 7 から出土した壺の底部である。内外面ともにナデ調整されている。

52、53 は調査区 10 から出土した。52 は壺の底部である。内外面ともに摩滅により調整は不明瞭であるが、内面には板ナデ痕が、外面底部には放射状に工具痕が確認できる。53 は壺の口縁部である。内外面ともにナデ調整されており、体部内面に指ナデ痕が確認できる。

54 は調査区 11 から出土した壺の底部である。内外面ともにナデ調整されており、底部付近にユビ

オサエが確認できる。底部はドーナツ状の上げ底になっている。

55、56は調査区3から出土した甕である。55は甕の底部である。内外面ともにナデ調整されている。56は甕である。体部は平行タタキ、口縁部はナデ調整が施されている。

57、58は調査区14から出土した甕の底部である。57、58ともに内外面ナデ調整。57の底部外面と58の内面にユビオサエが確認できる。

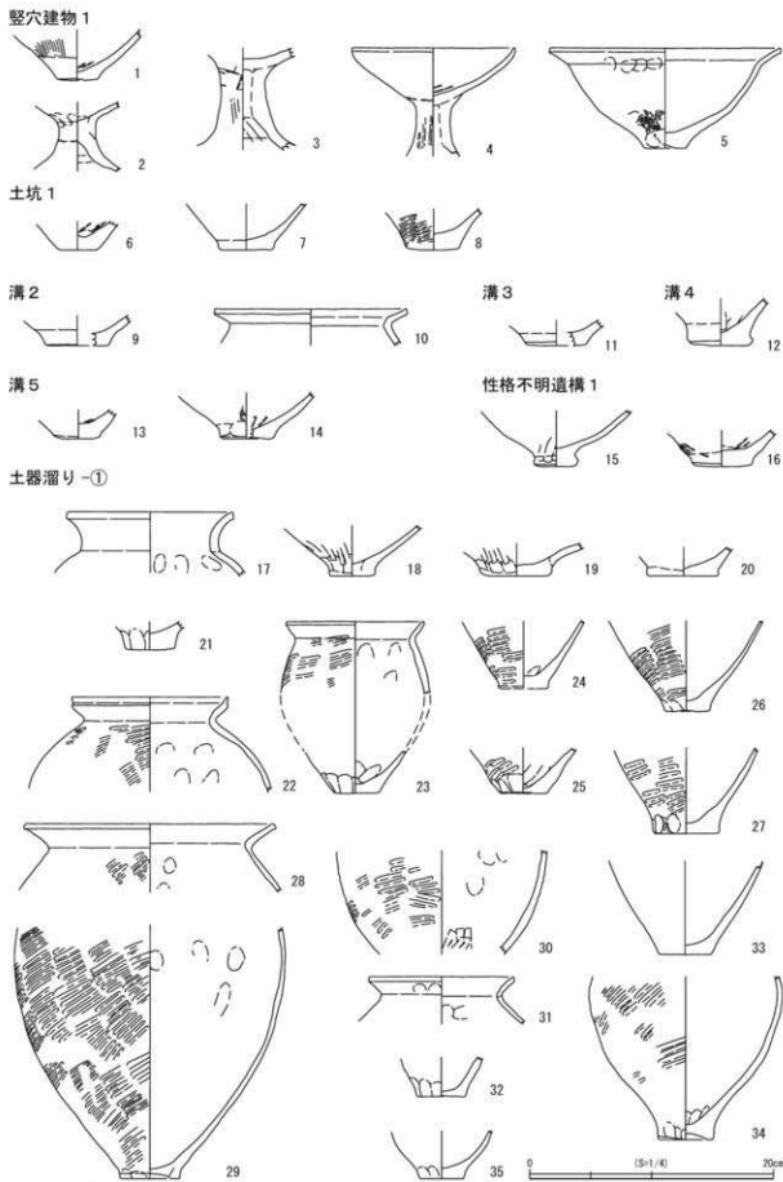
59～62は平成21年度調査区から出土した甕である。59は甕の口縁部である。内面はケズリ調整で、ほぼ全面に黒斑が残されている。60は甕の底部である。内面にクモの巣状のハケメが確認され、外側は右上がりのタタキで成形される。61は甕の底部である。摩滅が著しく内外面の調整は不明である。62は外反口縁甕の口縁部で、口縁端部に刻み目が施されている弥生時代前期の土器である。平成21年度と今回調査を通じて出土した土器のうち、前期の遺物は62のみである。

63は調査区1から出土した高杯の脚部である。摩滅が著しく調整は不明である。64は調査区10から出土した高杯の脚部で、外側はヘラミガキされている。

65は調査区1から出土した鉢の底部である。摩滅が著しく調整は不明。外側に煤が付着している。

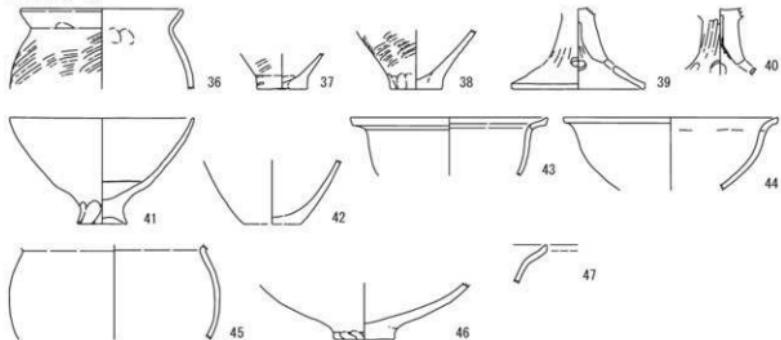
66は調査区3から出土した鉢の底部である。内外面ともに摩滅が著しく調整は不明であるが、底部は放射状に工具痕が残されていた。67は平成21年度調査区から出土した鉢である。底部が欠損しているがほぼ完形に近い状態で出土した。外側はタタキ調整され、全面に煤が付着している。

68、69は平成21年度調査区から出土した須恵器椀の底部である。68はSD18の表層、69は第II層下部から出土した。ともに轆轤による回転ナデ成形が施され、底部に糸切痕が明瞭に確認できる。68の焼成はよくない。平成21年度調査で、実測可能であった須恵器はこの2点のみである。

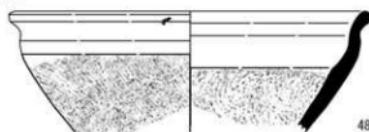


第14図 出土遺物 1 (1~35)

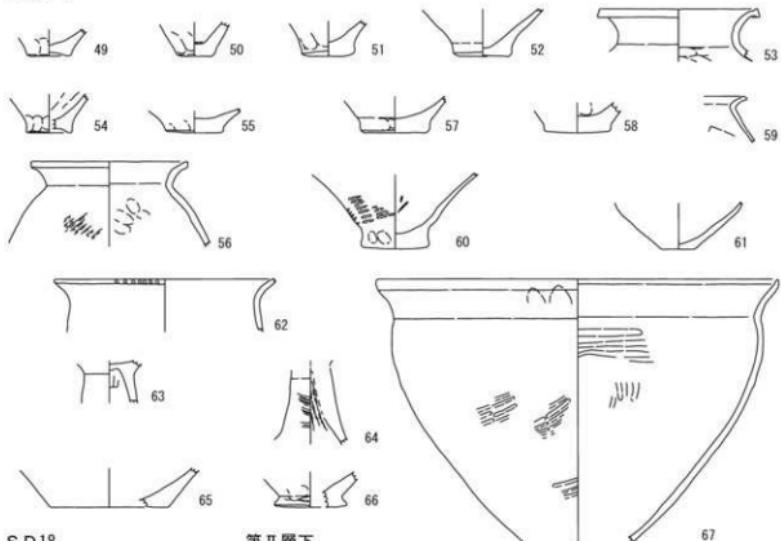
土器溜り～②



溝6



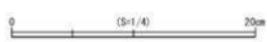
第II層中



S D 18



第II層下



第15図 出土遺物2 (36~69)

種別	器種	出土遺構	口径	器高(残存高)	底径	腹径	備考
1 弁生土器	蓋底部	堅穴建物 I		4.2	3.4		外面ヨコナデ 袋部上げ底 内面ナデ ユビオサエ
2 弁生土器	高杯	堅穴建物 I		5.7			外面ナデ ユビオサエ
3 弁生土器	高杯	堅穴建物 I		8.4			外面ミガキ ナデ
4 弁生土器	高杯	堅穴建物 I	13.4	8.9			外面ハゲ部ナデ 脚部ミガキ 内面ナデ 底部工具痕
5 弁生土器	鉢	堅穴建物 I	19.0	8.2	3.4	16.2	外面ハケ後ナデ 口縁部ユビオサエナデ 底部上げ底 内面ナデ
6 弁生土器	蓋底部	土坑 I		2.4	3.2		外面ナデ 内面ナデ ユビオサエ
7 弁生土器	蓋底部	土坑 I		3.8	4.0		外面ナデ
8 弁生土器	甕底部	土坑 I		3.4	4.0		外面平行タタキ 底部ナデ 内面ナデ
9 弁生土器	蓋底部	溝 2		2.5	4.6		外面ナデ
10 弁生土器	甕	溝 2	15.8	3.0			内外面ヨコナデ
11 弁生土器	蓋底部	溝 3		2.1	4.8		外面ヨコナデ 内面調整不明
12 弁生土器	蓋底部	溝 4		3.9	4.8		外面ヨコナデ 底部板ナデ工具痕 内面ヨコナデ
13 弁生土器	蓋底部	溝 5		2.4	3.9		外面ナデ 内面ナデ ユビオサエ
14 弁生土器	蓋底部	溝 5		3.8	3.7		外面タテハケ 底部ナデ ユビオサエ 内面ナデ
15 弁生土器	蓋底部	性格不明遺構 I		4.6	3.5		外面ナデ 内面調整不明
16 弁生土器	甕底部	性格不明遺構 I		3.0	4.4		外面平行タタキ後ナデ 内面ナデ
17 弁生土器	広口甕口 縁部	土器韌り	13.4	5.0			外面ナデ 内面ナデ ユビオサエ
18 弁生土器	蓋底部	土器韌り		3.8	3.6		外面ミガキ 工具オサエ痕有 外面底部ユビオサエ
19 弁生土器	蓋底部	土器韌り		2.6	5.8		外面ヨコナデ 外面底部ユビオサエ 内面ナデ 内面底部ユビオサエ
20 弁生土器	蓋底部	土器韌り		2.1	5.9		外面ナデ又ミガキ 内面底部中央附近に工具痕
21 弁生土器	蓋底部	土器韌り		2.2	4.1		外面底部ユビオサエ 外面やや被熱
22 弁生土器	甕	土器韌り	12.8	7.5			外面平行又は右上がりタタキ 内面ユビオサエ
23 弁生土器	甕	土器韌り	11.3	14.0	3.7		外面タタキ後ヨコナデ 内面オサエ後ナデ
24 弁生土器	甕底部	土器韌り		5.5	4.2		外面タタキ 全面被熱 内面ヨコナデタタキ 全面黒斑
25 弁生土器	甕底部	土器韌り		3.6	4.0		外面右上ヨリタタキ 外面底部ユビオサエ痕 内面ユコナデ 全面黒斑
26 弁生土器	甕底部	土器韌り		7.4	3.8		外面タタキ 全体的に被熱 内面調整不明
27 弁生土器	甕底部	土器韌り		7.1	5.1		外面タタキ 外面底部ユビオサエ痕 底部に黒斑有 内面調整不明
28 弁生土器	甕口縁部	土器韌り	20.6	5.6			外面右上ヨリタタキ 總縁部ヨコナデ 端部に黒斑有 内面ユビオサエ 細縁部ヨコナデ
29 弁生土器	甕	土器韌り		16.6	4.8	22.2	外面右上ヨリタタキ 内面ナデ又はオサエ 底部上げ底
30 弁生土器	甕胸部下平	土器韌り		8.4		17.7	外面右上ヨリタタキ 内面体部下平ユビオサエ 体底部ケズリ 内外面オサエ ナデ
31 弁生土器	甕口縁部	土器韌り	11.8	3.9			外面底部ユビオサエ
32 弁生土器	甕底部	土器韌り		3.1	4.0		外面ナデ
33 弁生土器	甕底部	土器韌り		7.6	4.2		外面タタキ 内面底部黒斑有
34 弁生土器	甕	土器韌り		13.3	4.5	15.4	外面タタキ 外面底部ユビオサエ 体部黒斑有 内面調整不明 底部上げ底
35 弁生土器	甕底部	土器韌り		3.9	3.5		内外面調整不明 外面被熱有 外面底部ユビオサエ
36 弁生土器	甕	土器韌り	13.2	6.6			外面タタキ 外面口縁部ナデ 内面調整不明
37 弁生土器	甕底部	土器韌り		2.9	4.0		外面タタキ 内面底部オサエ
38 弁生土器	甕底部	土器韌り		4.7	4.2		外面ナデ 内面ナデ
39 弁生土器	高杯脚部	土器韌り		6.7	11.0		外面タテミガキ 円形透かし4方向 内面しづり痕
40 弁生土器	高杯脚部	土器韌り		5.5			外面ミガキ 円形透かし4方向 内面しづり痕

表2 遺物観察表1

種別	器種	出土遺構	口径	器高(残存高)	底径	腹径	備考	
							内外面調整不明 底部上げ底	内外面調整不明 スス有 内面黒斑 底部穿孔の可能性有
41	弥生土器	鉢	土器底り	15.1	4.0			
42	弥生土器	鉢	土器底り	5.2	4.6			
43	弥生土器	鉢	土器底り	16.1	4.7			
44	弥生土器	鉢	土器底り	17.6	6.0			
45	弥生土器	外反口縁鉢	土器底り	7.8		17.5		
46	弥生土器	鉢底部	土器底り	4.6	4.9			
47	弥生土器	外反口縁鉢	土器底り	不明	3.2			
48	須恵器	鉢	溝6	29.0	9.9			
49	弥生土器	壺底部	第II層中		3.1			
50	弥生土器	壺底部	第II層中		2.4			
51	弥生土器	壺底部	第II層中		4.4			
52	弥生土器	壺底部	第II層中		4.2			
53	弥生土器	壺	第II層中	13.0	4.3			
54	弥生土器	壺底部	第II層中		3.2	3.2		
55	弥生土器	甕底部	第II層中		4.8			
56	弥生土器	甕	第II層中	12.8	7.0			
57	弥生土器	甕底部	第II層中		5.0			
58	弥生土器	甕底部	第II層中		5.4			
59	弥生土器	甕口縁部	第II層中	不明	3.8			
60	弥生土器	甕底部	第II層中		5.6			
61	弥生土器	甕底部	第II層中		2.6			
62	弥生土器	外反口縁甕	第II層中	18.2	4.4			
63	弥生土器	高杯	第II層中		3.5			
64	弥生土器	高杯	第II層中		6.3			
65	弥生土器	鉢底部	第II層中		3.2	9.6		
66	弥生土器	鉢底部	第II層中		4.4			
67	弥生土器	鉢	第II層中	33.0	21.7		30.4	
68	須恵器	楕底部	S D18		1.4	5.6		
69	須恵器	楕底部	第II層中		5.4			

表3 遺物観察表2

## 第IV章　まとめ

調査の結果、弥生時代の堅穴建物跡 1 棟、複数の溝状遺構、古代の耕作溝を検出した。また、平成 21 年の調査範囲では、投棄された土器集中部（土器溜り）が注目される。各調査区は狭小なため、堅穴建物跡を含め遺構の全形をとらえたものはほとんどない。

調査区 18 から検出された堅穴建物 1 は、検出されたプランから直径約 6 m の円形と推定され、床面直上から形のよく残った土器が数点出土した。この遺物から建物の時期は弥生時代後期と考えられ、これまで弥生時代から古墳時代の集落遺跡とされてきた栗津遺跡において、初めて弥生時代の堅穴建物を検出した事例となった。

建物跡の北西側からは、北東から南西方向にのびる溝が並行して数条検出された。これらは出土遺物や検出面の精査から堅穴建物と同じ弥生時代後期頃に埋没したと考えられる。溝の性格は不明であるが、これまでに溝の北西側で行われた調査では、土壤墓、溝、土器溜りなどが検出され、建物跡は検出されていないことから、集落内の居住域を開む区画溝の可能性が考えられる。そのように考えると、弥生時代の居住域はより南側へ広がるものと判断できるため、遺跡の範囲を現況より南側へ広げて考える必要があり、今後の周辺での開発に注意が必要であろう。

調査地内の出土遺物は、弥生時代前期の土器がごくわずかに出土したもの、おおむね弥生時代後期に集中している。

栗津遺跡の周辺には中期以前から、溝之口遺跡、美乃利遺跡、坂元遺跡などの弥生時代の大規模集落が集中しており、後期になってその影響を受けたと考えられる中小の遺跡が成立することが指摘されており※、今回の成果はそのことを裏付ける手掛かりになるものといえる。

今回は、現在の栗津遺跡範囲の南端部を調査し、はじめて弥生時代の堅穴建物跡を確認し、その集落域が南方に広がる可能性を提示した。今後は、遺跡の南側や近隣の関連遺跡も含め、改めて、過去の調査結果を見直し、栗津遺跡の集落動態や構造について検討していく必要がある。

### <引用・参考文献>

- 松下勝 1984 「加古川流域の遺跡」『日本の古代遺跡3 兵庫南部』保育社
- 渡辺界 2009 「おわりに」『坂元遺跡II』兵庫県教育委員会
- 笠置田雅昭 1989 『加古川市史第1巻2章3節』

# 図 版





写真3 完掘状況(西半)



写真4 完掘状況(東半)



写真5 調査区17北壁

図版 2



写真 6 堪穴建物 1



写真 7 堪穴建物 1 出土状況



写真 8 調査区17



写真 9 調査区11

図版 4



写真10 溝2



写真11 溝3・4・5



写真12 性格不明遺構 1



写真13 溝 6

図版 6



1



2



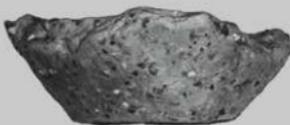
3



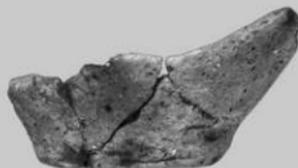
4



5



6



7



8

写真14 実測遺物 1

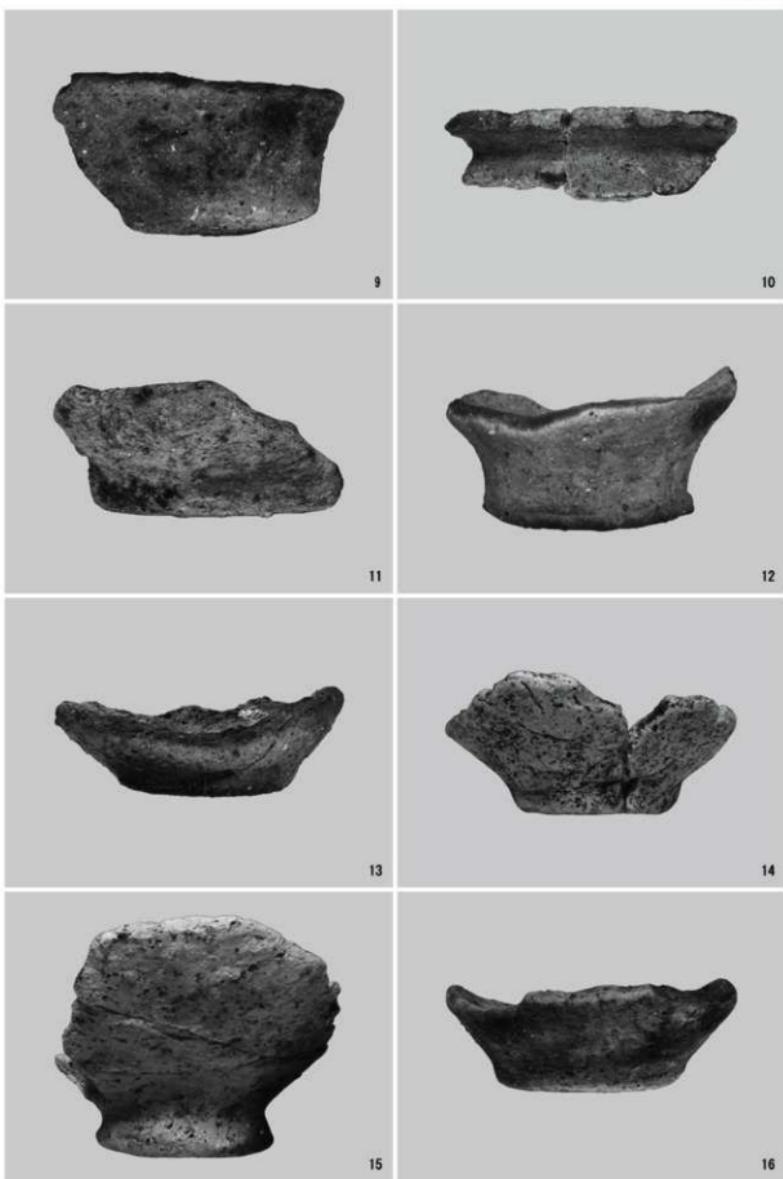


写真15 実測遺物 2

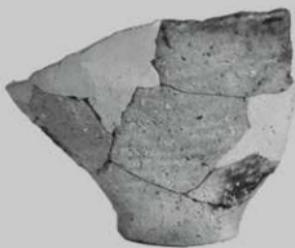
図版 8



22



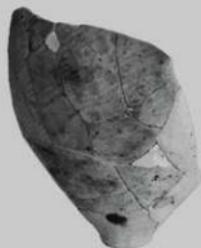
24



26



27



29



34



39



40

写真16 実測遺物 3

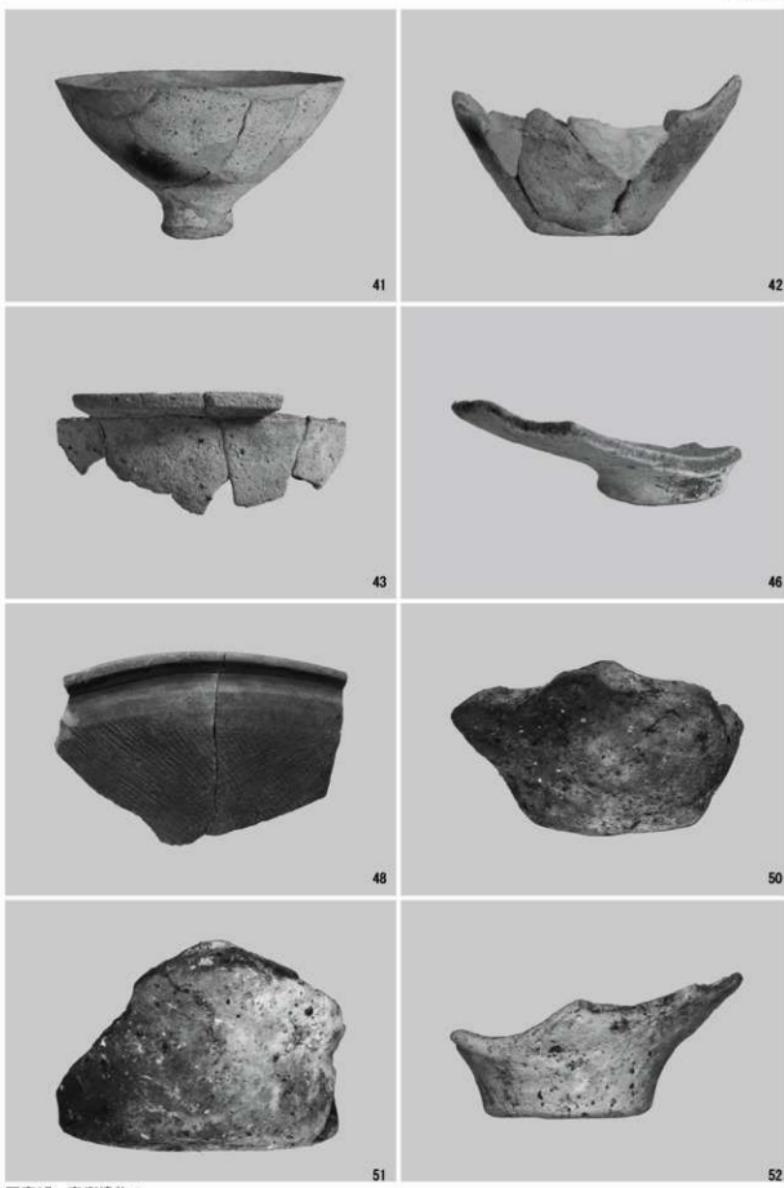


写真17 実測遺物 4

図版 10



53



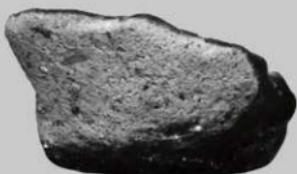
54



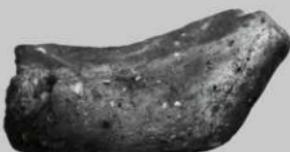
55



56



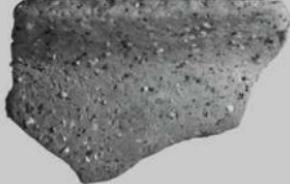
57



58



60



62

写真18 実測遺物 5

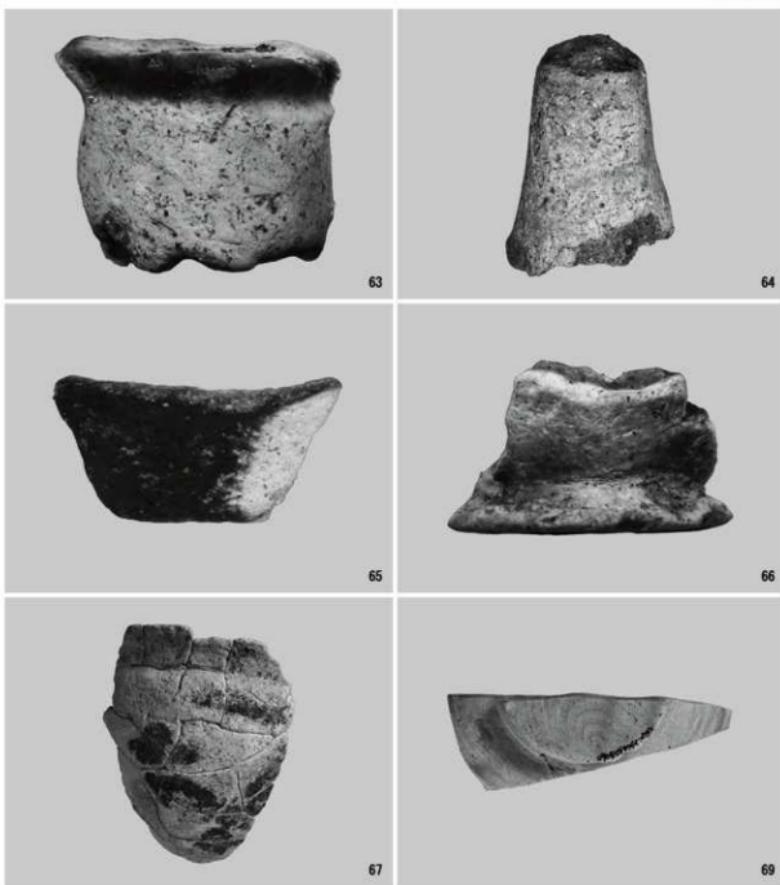


写真19 実測遺物 6

## 報 告 書 抄 錄

## 粟津遺跡発掘調査報告書

令和2（2020）年3月31日

編集・発行 加古川市教育委員会

〒675-0101 兵庫県加古川市平岡町新在家 1224-7

Tel 079-423-4088

印 刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良県奈良市南京終町 3-464

Tel 0742-63-0661